



思えば遠くへ来たもんだ

海援隊の歌にあったような気がする。リレーエッセイの締切まで後6日だったことを思い出し、ジャカルタ空港のロビーでパソコンを開いた瞬間このフレーズが頭に浮かんだ。

今年度はこれまでになく海外へ出る機会が多かった。6月に調査でスロベニアへ、8月は学会（17th Goldschmidt）でドイツへ、10月はUNIDO関連の水銀による海洋環境汚染防止のためのWG会議のためにイギリスへ、そして、その第二回会議が1月末にタイで行われ、今回はインターナショナルトレーニングプログラム（ITP）でインドネシアへ。おかげでANAブロンズカードをもらえてしまった。こんなことになるのは少なくとも10年前には全く想像もしなかった。

思い返せば、初めてちゃんと海外へ出たといえるのは、1999年にブラジルで開催された第5回水銀国際会議（5th ICMGP）への参加で、初めての国際学会発表でもあった。そのときは、口頭発表5分、質疑応答はポスター発表で行われたため、口頭発表会場では質問を受けずにすみ、ほっとしたのだった。しかしながら、口頭発表会場ではもちろん、ポスター会場へ行っても質問さえろくにできなかった。日本で水銀分析をやっている研究者は少なく、めったに学会でもお目にかからないので、水銀だらけの発表会場は宝の山に思えたのだが、英語が全く話せなかったのだ。泣きたいほど悔しいを思いかみしめつつ、カイピリーニャを飲みまくる毎日となった。ブラジルでは金採掘に伴う水銀使用によるアマゾン河流域の汚染が大きな問題になっており、学会のエクスカージョンも金鉱山の見学だった。金をアマルガムとして抽出するために水銀を使っている作業場の隅に男の子が一人ぼつんと座っていたのが妙に印象に残っている。

この5th ICMGPに日本から運営委員として参加していたのは国立水俣病総合研究センターの赤木洋勝博士で、それまでも水銀の分析や水俣湾の調査などでお世話になっていたのだが、このときには多くの海外の研究者をご紹介いただいた。その中のお一人がスロベニア共和国のミレナ ホルバット博士である。6th ICMGPが2年後に赤木博士を実行委員長として水俣で開催されたが、ホルバット博士とはその際に再会し水俣湾の調査なども合同で行った。スロベニアは世界第二位の水銀鉱山があった国（約10年前に閉山）で、ホルバット博士は、高感度な形態別水銀定量法を開発している。飲み会の席で一度行ってみたいと話したら、「いつでもウェルカムよ」と言われ（器具の洗浄法など周辺からのコンタミへのこだわりにお互い分析化学者として通じるものがあったからかも知れない）、JSPSの2国間交流事業に申し込んだら当たってしまった。2002年当時スロベニアは日本ではあまり知られていない国で、スロベニアへ一人で一か月行くという話をしたら、たいてい「危くない？」という問いが返ってきた。

スロベニアは、チト大統領の死後ユーゴスラビアから内戦を経て独立していった国の一つであり、セルビアークロアチア紛争などの悲惨な状況は日本でも報道されていた。ややびりつつ訪問したスロベニアは、西側に最も近かったこともあってか、経済的にも安定し、歴史を感じさせる落ち着いた国だった（写真は日曜日の朝市。農業が主要産業であり、物価はとても安い）。ホルバット博士は宿舍となるゲストハウスに家族用の部屋を用意してくれていた。キッチンには、電磁調理器が整備され、調理用具、食器は言うに及ばず、ワイングラスまで揃えられていた。Merkatorというスーパーマーケット



とも近くにあり自炊には何の問題もなかったが、店の人に話しかけたら逃げられたりして、「日本人と似てるなあ」と妙なところで親近感を覚えつつ、初めは塩を探すだけで店内を三周くらいしたりした。また、野菜や果物はそれぞれ籠に入って棚に並べられているが、タマネギを取ってレジに持っていったら、レジの女の子がじっと私の顔を見て黙ってそのタマネギを持ってどこかへ行ってしまった。いったい何が起こったのか分からないまましばし立ちつくしていると、シールを貼ったビニール袋に入れて戻ってきて、レジスターを通して会計してくれた。実は、野菜などはすべて籠に名前と番号がついており、必要なだけの野菜をコーナーに設置されている秤に載せてその野菜の番号を押すと、重さに基づく金額と商品名の印刷されたシールが打ち出されてくるので、それを貼り付けてレジに持って行くというシステムだった。レジの女の子はこの東洋人には説明しても分からないと思ったのだろう。見ているとバナナを房から1本もぎ取って秤に載せてシールを貼っていくという日本では考えられない技も普通に行われていた。ちなみにビールは大瓶1本が約100円という天国のような国だ。

さて、水銀鉱山はスロベニア西部のイドリヤにあり、そこは約500年間にわたって鉱山を中心に栄えてきた都市で、男たちが坑道に入っている間、女たちはレースを編んで待たせたという。民芸品としてもそのレースは有名で、レース編み大会なども開催されている。この地域に住む人たちはこの町が鉱山を中心に栄えてきたことに誇りを持っており、坑道はその一部が博物館として観光客に開放されるなど、水俣などとは状況は全く異なっている。しかし、イドリヤ川周辺には水銀を高濃度に含む鉱屑が堆積しており、鉱山近くではその水銀濃度は数千ppmにもなる。それが雪解け水の流入と雨季の水重なる5月に下流へと運ばれるため川沿いには高濃度の水銀を含む土壌が堆積している。イドリヤ川はソーチャ川へと注ぎ、隣国イタリアからアドリヤ海へと注ぐ。アドリヤ海ではかなり高濃度のメチル水銀を含む魚も捕獲されており、水銀鉱山由来の無機水銀の化学形変化の過程解明がホルバット博士との現在の共同研究の重要なテーマとなっている。

次回は、少林寺拳法の使い手、熊本大学の井原敏博先生に御願いました。乞うご期待。

〔鹿児島大学理学部 富安卓滋〕